

三浦半島における市民活動によるエコミュージアムの展開

—地域を学ぶ場としてのエコミュージアム活動に関する研究—

大原一興*¹
有嶋清之*²
藤岡泰寛*³

キーワード : エコミュージアム、博物館活動、市民活動、生涯学習、環境保全、まちづくり、三浦半島

1. 研究背景と目的

エコミュージアムとは、「ある一定の地域において、地域住民が主体となって、地域の資源に対して博物館活動すなわち調査・研究、保存・保全、展示・教育を行うシステム」のことである。

地域住民が博物館活動を行っていく中で、地域のことを総合的・多面的に捉え、地域の現状を知り、将来像を描くことが出来るようになることが期待されている。

地域のエコミュージアム化に向けた取り組みには決まった方法があるわけではなく、試行錯誤のなかで絶えず模索していかなければならない。

三浦半島においては、「三浦半島まるごと博物館連絡会」^{注1)}という組織が推進役となり、市民団体や行政とが交流・連携をおこなう中で三浦半島域のエコミュージアム化に向けての活動を行っており注目されるが、この組織もまた、試行錯誤の最中である。

そこで本研究では、「三浦半島まるごと博物館連絡会」とその活動に着目し、その現状と意義・課題を明らかにすることで、市民活動の交流・連携を通じたエコミュージアム化への取り組みを推進する組織・活動の展開の仕方と参加した個人に与えた学習の効果について考察する。

2. 研究の方法

本研究では、まず①三浦半島まるごと博物館（以下まる博）の取り組みが始まる以前2004年に行った三浦半島における市民団体へのアンケート資料^{注2)}により、ネットワーク化のベースとなる市民活動団体の実態がどのようなものであったかを明らかにし、②三浦半島まるごと博物館関連資料と、かながわ学術研究交流財団（以下K-FACE^{注3)}）と神奈川県（いずれも「まる博」の事務局・推進役）へのヒアリングを行うことで「まる博」のこれまでの取り組みと組織などを整理し、③「まる博」関連市民団体へのアンケート・ヒアリングを行い、ネットワーク化の取り組みの現状・意義・課題を明らかにする。

3. 三浦半島エコミュージアム構想と「まる博」

3-1. 構想のこれまでの経緯

三浦半島は首都圏の西南部に位置し、三方を海（東京湾、相模湾、太平洋）に囲まれ、南北約21km、東西は最大部分でも7~8kmで縦（南北）に細長い半島で、東京湾をはさんで房総半島に相對している。東京や横浜への通勤が可能であるため、住民の大半は都会型の生活を営む地域となっているが、温暖な気候に加え、豊かな緑に恵まれ、変化に富む半島景観と多くの歴史的・文化的な遺産・資源が残り、半島内外の多くの人々に親しまれている地域である。

このような、すぐれた地域の自然・生活・歴史・文化・産業・芸術などの資源に富んだ地域において、内発的にその資源の価値を継承しより豊かなものへと昇華させていくのは、日常的に地域に関わることでできる住民に他ならない。この地域の価値をつくり育てていく住民に、その意識と活力が無ければ、地域の発展は期待できないと言えよう。そこで、地域全体をひとつの博物館と見立てて、地域に点在する資源や遺産をコレクションとし、博物館活動を進めていくエコミュージアムの発想を取り入れることが有効と考えられた。これは三浦半島全域を優れた社会教育、生涯学習のシステムとして、地域の住民が潜在的な力を獲得できるようにするものである。三浦半島におけるエコミュージアム構想について、その可能性と実現性を検討するために、K-FACEでは検討俊樹として2000年に「三浦半島エコミュージアム研究会」を立ち上げ、横浜国立大学建築計画研究室が協力し構想化を進めてきた。

三浦半島エコミュージアムの目的は、三浦半島内に居住する住民のうち、ひとりでも多くの人が、「三浦半島」という言葉で統合された自らの地域に対して、誇りを持って大事にし、守り、育て、自ら作り上げていくための活力・技術・意欲・精神を獲得していくことにある。三浦半島の地域内には、豊富な地域資源やそれを活かした活動がすでに存在しており、それら草の根的な自主活動

*²フリー

*³横浜国立大学大学院工学研究院 講師

*¹横浜国立大学大学院工学研究院教授
／三浦半島まるごと博物館連絡会顧問

をつなげていくことによって、全体が形成される。つまり、三浦半島エコミュージアムを形成するにあたっての主たる方法論としては、それらの活動や地域資源を「つなぐ」ことが特徴となっている。

3-2. 三浦半島エコミュージアムの構成モデル

三浦半島エコミュージアム研究会の検討(2000-2003年)の結果、練られたものが「三浦半島エコミュージアム構想(2004年)」である。ここでの構成モデルは、以下のように考えられた。

まずエコミュージアムの構成要素は、地域における市民活動によって支えられた多様な文化・自然・産業等の遺産(heritage)群である。その各遺産の置かれているサイト(site)のネットワークの総体がエコミュージアムを形づくる。そのためにネットワーク化を図り、各組織を連結し、活動を助長・支援する媒介としての役割が必要で、それがエコミュージアムの本部組織となる。

各サイトは、地域遺産の拠点としての限定された地点である場合や、資料が密度高く集約された博物館の場合や、ある集落といった一定の狭域地域の場合や、またある特定の地域の伝統的な習俗や民俗風習などの場合などがある。サイトの範囲や対象は様々なものが考えられる。さらにこの場合のサイトには、上下優劣の階層は無く、エコミュージアムとして参加し位置づけられる場合には、すべてが同等の権利をもち対等の関係として連携することとなる。

エコミュージアムのサイトが成り立つためには、そこにモノとしての遺産や場所があるだけでなく、そこに固有の人の営みとしての住民活動が一体的におこなわれていなくてはならない。このような、各サイトにおける遺産と住民活動が一体になったまとまりのある単位を、ここでは、エコミュージアムのパートナーと呼ぶことにした。つまり、エコミュージアム全体はパートナーの集合体として形成されていく。

このような要素をもとにして、地域において、モノ(遺産・場所)、ヒト(活動)、システム(本部組織の働き)が確立していくことがエコミュージアムを確立する基本要件となる。このことは以下のように示すことができる。

エコミュージアム = Σパートナー + 本部組織

パートナー = 遺産・場所(自然、文化、歴史、産業 etc.)

+ 市民活動(保存活動、伝統文化継承活動、地域文化や環境の調査研究、エコロジー活動、地域固有の産業創出、まちづくり学習活動 etc.)

これは、人間に例えると、

エコミュージアム: 人間の総体 = Σ身体器官 + 意思・ころ・神経網・(中枢)

パートナー: 身体器官 = 部分身体組織(肉と骨など) + 動的システム(生きていくために酸素を供給する血液や気のようなもの)

とみなすことができる。このように、三浦半島をひとつの人間の生命体を比喩としてエコロジカルに生き続け成長するモデルとして考えることができると言えよう。

3-3. おおくすエコミュージアムの会の立上げ

三浦半島のエコミュージアムを進めていく上での方法論を確立するために、介入研究として、拠点的な地域の活動として「おおくすエコミュージアムの会」を発足させ、活動が自立するまでの支援をおこなった。

この会のテーマは、「地域の自然、歴史、文化の発掘と活用、継承」とし、テリトリーとする地域、大楠地区は、横須賀市西部に位置し、大楠山を囲むように街区を形成している人口約16,000人の地域である。まとまった自然を残し、海と山に囲まれ風光明媚な場所である。しかし交通の便が悪く、住民は横須賀の中心地域とは隔絶した土地であるという意識を持っている。環境の変化により自然や歴史的なものが失われつつある中で、住民は豊かな環境を守りたい、地域を良く知り次世代にその良さを伝えていきたいとの思いを持っている。

2001年8月にまず「大楠地区学習会」を実施し、同年12月には「(仮称)再発見おおくすの会」を発足、月に1回のペースで地域について語り合い、様々なフィールドワークを実施し続け、中心メンバー15名により2003年4月に正式に正式に発会した。大楠山、前田川の自然環境の観察会や、博物館や学校と連携しながら伝説の子産石の研究やそのシンポジウムの開催、また、長屋門などの歴史資源の修復の協力などもおこなうようにまでなった。調査の成果をマップ入りの“しおり”にまとめイベントごとに配布している。

4. 「まる博」設立以前の三浦半島内の市民活動の状況

4-1 三浦半島における市民活動の実態

この三浦半島地域には、さまざまな市民活動が育っている。これらの既存の市民活動がそれぞれエコミュージアムのパートナーとして自覚していくことによって、これらが意識的につながり、地域全体のエコミュージアムを形成することができるものと思われる。そこで、三浦半島地区での住民団体やその活動の特色・方向性や交流・連携の現状を把握するための調査を2000年と2004年に実施した。結果は以下のとおりである。

① 団体間の連携

・歴史系:この分野は生涯学習的な要素が強く、いくつかの団体にまたがって所属している会員が多い。それぞれの団体で得意の分野の講師となり、お互いに学習会を開き交流を進めている。

・環境系:活動のフィールドが共通・重複していることが多く、情報・人材・イベントなどで協力するなど他の分野に比べてお互いの活動の連携が進んでいる。

・文化系:団体の数は一番多いが、活動内容が趣味的な

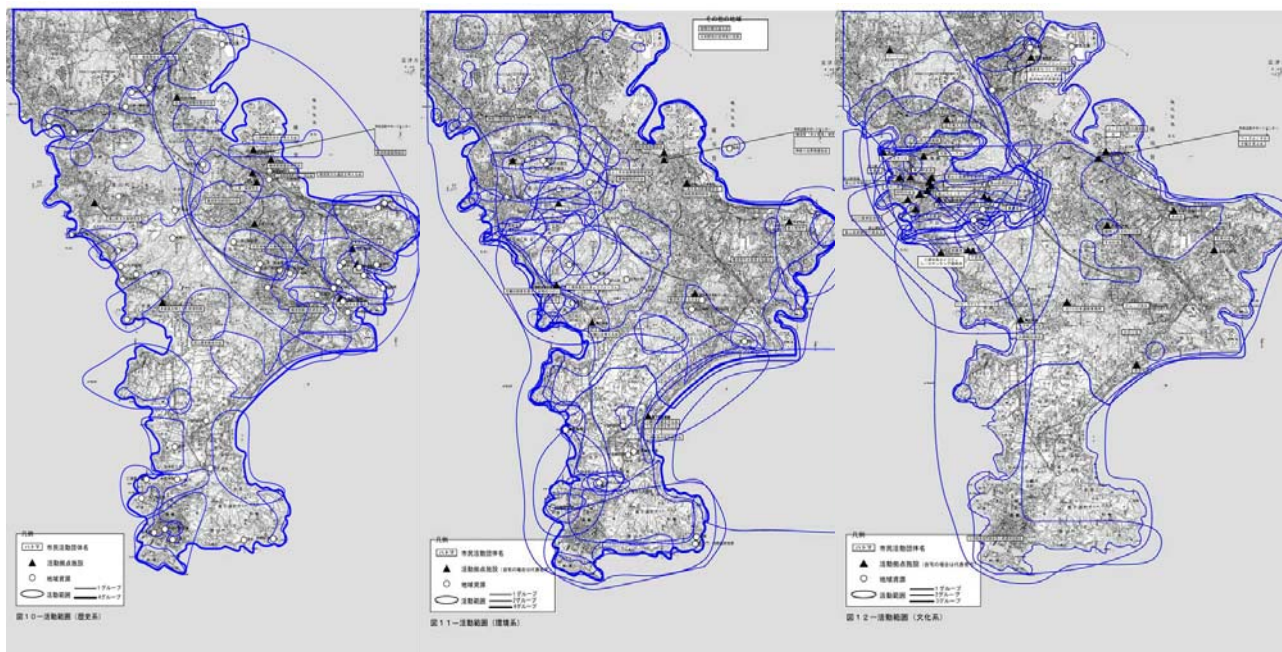


図1 市民団体の活動範囲左から「歴史系」「環境系」「文化系」

要素が強いためか、他の団体との協力関係は弱い。全体として、歴史、環境系で団体間の交流が盛んであるが、概して分野を越える交流は弱かった。ちなみに「横須賀市自然・人文博物館」や「葉山町しおさい博物館」などは、異分野間のネットワークの中間におり、仲介の役割を果たしているようである。

② 活動拠点となる施設利用

歴史系は、生涯学習講座や、そこから派生する場合が多く「公民館」などを活動拠点にしているグループが多い。環境系は、フィールドを重視するためか、施設立地にとらわれない地域活動が展開されている。文化系では、さまざまな施設利用が見られるが、「個人宅」や「町内・自治会館」等の身近な施設を多く利用している。

③ 活動範囲 (図1参照)

- ・歴史系：横須賀の東海岸地区にやや密度が濃く分布する。歴史系の市民活動グループは、行政区を越えて活動範囲をもっており、三浦半島全体に、密度が均一に点在している。
- ・環境系：比較的自然的に残っている緑地一帯と、海岸部（特に浜辺と岬部分）に活動地が重なっている。
- ・文化系：地域の都市部に活動範囲が集中している。また、行政の呼びかけからできた団体が多いため、行政区域または居住地域周辺で活動する例も多い。

4-2 市民団体の活動分野

回答団体の活動は、活動分野によって、歴史・文化のみ型、自然環境のみ型、歴史・文化、自然環境複合型、多分野型、その他の分野に分けることが出来た。

各活動内容についてみると、多くの団体が博物館の要素、つまり調査・研究、(収集)・保存、展示・教育を行っていることがわかる。

活動分野としては歴史系の団体には「まちづくり」を活動分野に挙げている団体が比較的多く、自然環境系の団体には、「教育」を活動分野にあげている団体が多かった。趣味的な活動にとどまらず、公益的な活動を対象としていることが分かる。

次に活動を行う上での問題点を各団体個別に見てみると、「他の団体と連絡する方法を持っていない」「学校との連携をしたいと思うが、学校のニーズが分からない、学校側のニーズをヒアリングするチャンネルを作っていない」などといった人的ネットワークに対する問題や、「三浦半島でのいろいろな地域活動や会の情報を取り集めて、相互に活動方法や運営方法、問題点について語り合う場が欲しい」「同分野他団体と顔を合わせてみたい」、または、「それぞれの分野でどんな方がいるのかが分かれば、講師をお願いしたいという」などといった意見があり、三浦半島の市民活動を取りまとめる組織を求める声があったことがわかる。

しかし、一方で、他団体との交流に関して、「どう交流していいかが想定できない」、や「現状でも十分活動できている」と答えた団体もある。また、「他団体と協力しながら活動を行えると思うが、自分たちの活動で手一杯で、具体的に何かを期待するわけではない」「団体内での調整が困難」といった意見も聞かれた。

4-3 「三浦半島まるごと博物館連絡会」とその組織・活動内容

これらの活動団体を結びつける試みとして、2005年に三浦半島におけるエコミュージアムの実現を目指して活動をはじめたのが「三浦半島まるごと博物館連絡会」である。これは行政、市民団体、顧問(識者)、連絡会会員市民団体から選ばれた幹事で構成される。

「各地域でエコミュージアム関連活動を行う団体相互

及び行政機関等との交流・連携を図ることにより、地域を総合的に学ぶ場づくり、地域の活性化、及び魅力ある域づくりを進めること」を目指し、全体ミーティング、ツアー（探訪会）の開催、フォーラム（交流イベント）の開催、季刊のパンフレットの発行、ウェブサイトの開設・運営、ガイドブックの作成などといった活動を現在行なっている。（詳細は表1）

現状では行政および財団（KIF）が事務局になり、幹事と各活動の企画・立案を担っており、それを連絡会において話し合い、実行に当たっては会員団体・行政が連携して行っている。

表1 三浦半島まるごと博物館連絡会の概要

1. 三浦半島まるごと博物館連絡会の構成	三浦半島内で活動する市民団体(46団体)、学識経験者、行政機関(横須賀市、鎌倉市、逗子市、三浦市、葉山町)、(財)かながわ国際交流財団、神奈川県横須賀三浦地域県政総合センターによって構成されている。市民団体の中から選ばれた幹事3名が会の進行を務める。
2. ツアー（探訪会）の開催	会員団体の中から各回3団体程度が担当し、自らの活動の対象地域で、その対象地や活動のインタープリテーションを行う。参加者は、連絡会会員団体のみの場合と一般公開で行うものとの両方がある。
3. フォーラム（交流イベント）の開催	毎年1回、参加団体を対象にフォーラムが開催されている。第一回目のテーマは、『三浦半島の「みち」から地域を再発見』として参加者は128名、1. トークセッション「三浦半島みちトーク」2. 活動団体事例発表 3. 交流会&ポスターセッションを行った。第二回目は「三浦半島の野道を楽しむ」というテーマで、1回目と同様な内容に、カントリウォーカーの講演が加わったプログラムであった。
4. 季刊の活動パンフレットの発行	かながわ国際交流財団により、年に四回発行されている。各団体に配られるほか、県施設やサポートセンター等に置かれる。内容は 1. エコツアー、フォーラム等の三浦半島まるごと博物館関連の活動の紹介及び告知 2. 各団体の行うイベントについての告知 3. 連絡会会員団体の活動紹介 4. 地域の博物館の紹介である。
5. ウェブサイトの開設・運営	ホームページでは、三浦半島まるごと博物館連絡会の説明、会員団体の活動内容の紹介とイベントの告知、リンクの紹介、過去と今後の関連活動の紹介、事務局の連絡先等が、掲載されている。
6. ガイドブックの作成	地域住民および、来訪者に、三浦半島の資源の価値を学習してもらうことを目的に、三浦半島の資源に関する情報を集め、整理、補完し、それをまとめたもの。県が印刷費を出し財団が調整役となり、各団体がそれぞれの活動対象について原稿を書き、団体の中から選出された編集委員によって作成された。年間1冊ずつ編集し、現在までに2冊発行されている。

5. 「三浦半島まるごと博物館」連絡会会員団体の現状
「まる博」連絡会の会員団体は、各々地域で目的・テーマをもち、調査・研究、保全・保存、探訪会・展示会などを行っている。

5-1 連絡会への入会動機

図2を見てみると会員団体の連絡会への参加動機は、「三浦半島の他団体の活動内容を知りたかったから（78%）」、「三浦半島の他団体との交流が持ちたかったから（56%）」、「団体の活動の参考となるノウハウや情報を得たかったから（39%）」など、他団体との交流等や、「団体の活動を広めたかったから（44%）」、「団体の活動の広報手段の一つとして（39%）」など、団体の活動の一

つのアウトプットとして、または、「三浦半島まるごと博物館の趣旨に賛同したから（72%）」というものがあつた。

さらに図3で、「まる博」の取り組みに期待することとしては、上記の参加動機が満たされることその他、「三浦半島の魅力を他団体とともに掘り出すこと（83%）」、「三浦半島の問題点・課題を他団体と共有すること（56%）」など個々の団体の活動のためというよりは三浦半島地域が良くなることを期待しているものが多く見られた。三浦半島において「まる博」関連の活動の中で得られたこととして、図4のように、「他団体の活動内容や考えを知ることができた」（78%）という意見が多かった。

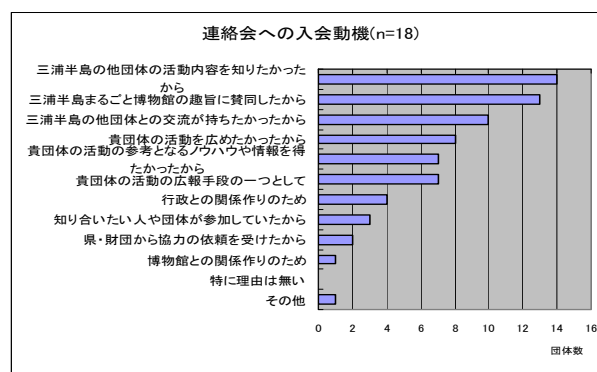


図2. 連絡会への入会動機

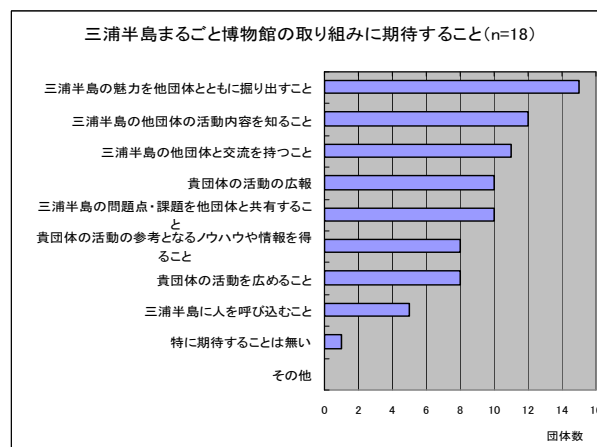


図3. 期待すること

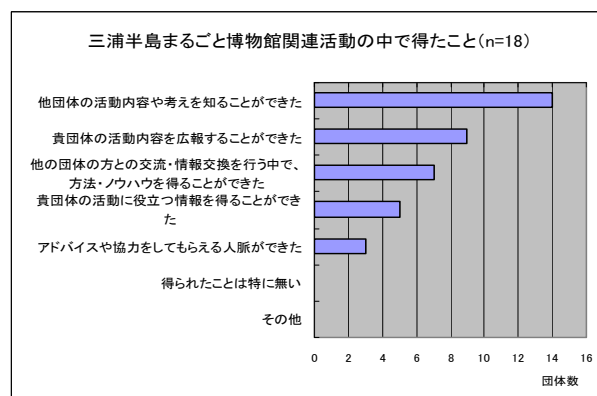


図4. 三浦半島まるごと博物館関連活動の中で得たこと

5-2 三浦半島まるごと博物館連絡会における互いの活動内容の把握状況とかかわり状況

活動団体がお互いに他団体の活動内容を把握しているか、また活動同士の実際のかかわり状況については、名称のみ知っているというものも少なくはないが、活動分野を問わず他団体の活動内容についてより把握するようになっているという状況が確認できた。

以下に、市民団体へのヒアリングによって分かったそのようなネットワークの意義をまとめる。

分野	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
分野	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
名称	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
NPO法人オーシャンファミリー-海洋自然体験センター					
NPO法人かながわ環境カウンセラー協議会横須賀三浦支部					
神奈川県環境自主保全グループ「こさく」					
(財)鎌倉風致保存会					
NPO法人環境ファミリー-葉山					
小網代の森を守る会					
猿島の会					
ずし環境ウークス					
ずし環境会議「まちなみと緑の創造部会」					
津久井の自然を守る会					
名越里山緑地の会					
葉山の環境を守る会					
三浦竹友の会					
三浦半島自然保護の会					
よこすか自然環境探偵団					
よこすか市民会議(YCC)					
横須賀「水と環境」研究会					
湘南国際村から夕陽を見る会					
三浦半島自然誌研究会					
浦賀文化サークル					
三浦半島の文化を考える会					
浦賀探訪くらぶ					
うわまち教会建物応援団					
大津探訪くらぶ					
古部フォーラム鎌倉					
ずし地名と歴史の会					
横須賀開国史研究会					
三崎白秋研究会					
横須賀学舎の会					
おおくすエコミュージアムの会					
廻子ミュージアムの会(仮称)					
NPO法人葉山環境文化デザイン集団					
(社)神奈川県建築士事務所協会横須賀支部					
廻子観光推進の会					
三浦半島活断層調査会					
横須賀市観光ボランティアガイド					
NPO法人よこすかバートナーシップサポーターズ					
不明 HUG(ハブ)					

図5 入会前の交流

分野	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
分野	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
名称	環境	文化	歴史	歴史・文化・環境	その他
NPO法人オーシャンファミリー-海洋自然体験センター					
NPO法人かながわ環境カウンセラー協議会横須賀三浦支部					
神奈川県環境自主保全グループ「こさく」					
(財)鎌倉風致保存会					
NPO法人環境ファミリー-葉山					
小網代の森を守る会					
猿島の会					
ずし環境ウークス					
ずし環境会議「まちなみと緑の創造部会」					
津久井の自然を守る会					
名越里山緑地の会					
葉山の環境を守る会					
三浦竹友の会					
三浦半島自然保護の会					
よこすか自然環境探偵団					
よこすか市民会議(YCC)					
横須賀「水と環境」研究会					
湘南国際村から夕陽を見る会					
三浦半島自然誌研究会					
浦賀文化サークル					
三浦半島の文化を考える会					
浦賀探訪くらぶ					
うわまち教会建物応援団					
大津探訪くらぶ					
古部フォーラム鎌倉					
ずし地名と歴史の会					
横須賀開国史研究会					
三崎白秋研究会					
横須賀学舎の会					
おおくすエコミュージアムの会					
廻子ミュージアムの会(仮称)					
NPO法人葉山環境文化デザイン集団					
(社)神奈川県建築士事務所協会横須賀支部					
廻子観光推進の会					
三浦半島活断層調査会					
横須賀市観光ボランティアガイド					
NPO法人よこすかバートナーシップサポーターズ					
不明 HUG(ハブ)					

■=活動内容をよく知っている
 ■=活動内容を大体知っている
 ■=名称のみ知っている

図6 入会後の交流

- 1) 〈団体の間接的・潜在的活動支援〉
 連絡会加盟団体は、三浦半島まるごと博物館連絡会の活動に参加することで、①他団体の活動が分かる ②自団体と他団体との関わりが分かる ③人と人とのつながりを得る ④他団体に支援・アドバイスを求めることが出来る ⑤活動のノウハウを学ぶことが出来る ⑥いろいろなアイデアにつながる、ということを得ている。
- ④のような他団体への支援・アドバイス依頼は知り合

いがあるのはじめてお願いできるという意見があり、「知り合い」基盤の形成というネットワーク要素の意味は大きい。

さらに、ヒアリングからは「団体内の、あるメンバーが他団体に知り合いがあり、それがきっかけで支援依頼を受けた」などということが聞かれた。団体と団体というよりは、個人と個人との知り合い関係が重要であるということが言える。また、そのような活動の支援依頼が行なわれるまでには、他団体の活動がわかる→自団体との関わりが見える→活動の支援依頼という段階によって進んできている。

三浦半島まるごと博物館関連の活動の中で得られたこと(図4)として「他団体の活動内容や考えを知ることができた」という意見が多かったが、そのように「他団体の活動を知っているだけ」というのも、その後の活動につながる潜在的可能性を持っている。

2) <会員団体内の個人が「地域を総合的に学ぶ場」>

三浦半島まるごと博物館連絡会の会合や、ツアーなどのフォーラムに参加しているのは、結局市民団体ではなく、市民団体の中の個人である。

ヒアリングの中で、「私は、地域のことをまだよく知らない。知る方法を知らない。連絡会の活動のなかで、他団体の活動や考えにふれ、地域のことを知るノウハウを得た」という意見が聞かれた。連絡会の活動が、個人に他団体の活動内容に触れる機会を提供し、その中で「地域のことを知るための新たな視点」を取り入れられるようになり、会員団体内の一部の個人にとっての「地域を総合的に学ぶ場」を達成していることになる。

3) <多分野ネットワークの構築>

ヒアリングのなかでは、もともと他団体との交流や関係が有った、と言う声も聞かれた。

「まる博」連絡会発足前の他団体の活動内容の把握状況(図5)を見てみると、団体による大きな差があるものの環境系の団体では環境系の団体を中心として、文化・歴史など他分野についても比較的少ないが活動内容を把握している傾向が確認できた。文化系や歴史系の団体では、同じ分野については他団体の活動内容を知っているが、環境系の団体の活動内容はほとんど知らないという傾向がある。また、知り合いのいる団体を見ても、環境系の団体では、同じ環境系の団体に知り合いが多く、文化・歴史系の団体においても、同じ分野に比較的知り合いが多く、他分野についても若干の知り合いが見られた。つまり、連絡会入会前のネットワークとは、同分野内に限定された交流にすぎないと言える。

一方、「まる博」連絡会入会後の他団体の活動内容の把握状況(図6)では、団体による大きな差が有るが、連絡会入会によって他分野の団体の活動内容の把握が進み、

新たに他分野の団体への知り合い関係の構築も確認された。

一方、今後の課題として「当会員全体にまる博活動の内容を周知させることが難しい」「今後どう活動していくかがこれからの問題」「財団(KIF)や県(行政センター)が主催・企画している段階では「まる博」が軌道に乗っているとはいえない。まだ自立しているとはいえない。」などの問題点が聞かれた。

6. まとめ

三浦半島まるごと博物館の発足による交流と、それに関連した活動を各自がおこなうことによって、分野を超えた他団体の活動内容の把握や交流、知り合い関係の構築が確認された。また、それが結果的に団体自身の活動の支援になっている現状も明らかになった。

連絡会の会合、フォーラムに参加する会員個人にとっては、その活動の中で他団体の活動内容に触れて、地域のことを知る新たな視点を取り入れることができるという意義も分かった。これは、一つの分野・視点をこえて多様な方向から地域を捉えることができるようになるという、エコミュージアムの一つの意義であると言える。

今後は、各団体の展示会や探訪会に参加している地域の人々や各団体の中の連絡会に参加していない個人に対して、地域のことを捉える新たな視点へ触れる機会をいかにつくるか、ヨーロッパのエコミュージアムで今現在課題となっている、ソーシャル・インクルージョンの達成が課題と考えられる。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた三浦半島内エコミュージアム実践者の方々、および柳田純氏(元かながわ学術研究交流財団)に記して謝意を表します。

<注>

- 1) 詳細は、三浦半島まるごと博物館連絡会ホームページで紹介されている <http://www.ecomuseum-miurahanto.jp/>
- 2) 2004年実施した調査で、対象は、三浦半島内の逗子市、葉山町、三浦市(当初想定していた領域で鎌倉市は含んでいない)における活動団体である。文1)に発表している。
- 3) 2007年4月より、統合され(財)かながわ国際交流財団(KIF)と名称が変わっているが、設立経緯に関わる記述の部分では活動当初の名称で記載した。

<参考文献>

- 1) 柳田純・大原一興：三浦半島におけるまちづくり市民活動の地域特性、日本建築学会学術講演梗概集E-2、pp.657-658、2001
- 2) 有嶋清之・大原一興・藤岡泰寛：三浦半島におけるエコミュージアムの展開に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集E-2、pp.53-54、2007
- 3) Ohara, K., and Yanagida, A.: Ecomuseums in Current Japan – the Background and Vision-, pp.27-34, “Museum and Citizenship”, Quaderrmi di ricerca, No. 108, Istituto di Ricerrche Economico-Sociali del Piemonte, 2005
- 4) 大原一興：エコミュージアムへの旅、鹿島出版会、1999